
原宿パレット

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原宿パレット

【Nコード】

N3562D

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

朝モヤの立ち込める中、「僕」は明治神宮を歩く。それは、以前付き合っていた彼女の記憶に、浸りたかったからだ。・・・拙作『原宿ワツフル』の姉妹篇です。『ワツフル』と合わせてご覧下さい。いや、別に合わせなくても大丈夫ですけど。

僕にカメラのイロハを教えてくれた人は、かつてこう語っていた。「カメラマンにとってカメラっていうのは、画家からすれば絵筆とキャンパスみたいなものなんだ。そして、出来上がった写真っていうのは、作品そのものなんだ」

勿体つけた言い方をする人だったけれど、その人の言い分を意識すると、「カメラマン、っていうのは、芸術家なんだ。そして、写真っていうのは、芸術なんだ」ってところなんだろう。

カメラの事を知らない人はぴんと来ないかも知れないけれど、写真っていうのは、確かに「芸術」の名を冠してもいい文化活動だ。あるときは絞りをいじったり、またあるときは光と被写体との位置関係を計算したりして、頭にあるイメージをネガに焼き付ける。その作業は、画家が見て感じたイメージをキャンバスに写し取る作業に似ていないこともない。

けれど、僕はあることに気づいてしまった。

確かに、絵画と写真はよく似ている。だが、その二者には大きな隔たりがある。

写真は、絵と違って、そこに実在しないものは描き出せない。その事に思い至った僕は、カメラを撮るのを止めた。本当に写真に撮ってまで残したかった被写体は、もう僕の目の前にはいない。たぶん、その事実には、嫌気が差したんだろう。

朝。

僕はモヤの中を進む。昨日降った季節外れの雨と、秋の割に優しい太陽のせいで、目の前の風景がぼやけてしまっている。けれど、あと少しすれば、そのモヤもハケていく。それを経験的に知っている僕は、あまりモヤを気にも留めずに、歩きなれた道を、歩みに乗せて躍り、騒ぐ砂利たちを踏みしめながら抜けていく。

やがて、僕の想像通り、モヤがハケてきた。

そして、モヤの切れ間を縫うようにして、目に毒々しいまでに生命力のある緑色が飛び込んできた。そういえば、東京の只中にあるはずなのになんでこんなにエネルギーがあるのかな、とあの娘は不思議そうに首を傾げていたな、と、僕は何とはなしに思い出していた。

まるで、思い出をそのまま形にしたようなモヤ。そのモヤは、ほとんど消えていき、現実を僕に突きつける。モヤが消えたあとには、大きな参道、そして、白い砂利道、そして原生林のように混沌とした杜、そして、木製の大きな鳥居が現れ始めた。

ここは、明治神宮。原宿に足を伸ばしたことがある人ならご存知だろうけれど、原宿駅の、新宿方面行きの電車が停車する側に控える林。あれが明治神宮だ。

明治天皇を祭る神宮として、やはり東京に鎮座したかったらしい。だが問題があった。それは、当時帝都東京に神様が鎮座できるような、厳かな森が既に無かったことだ。そこで、西洋の知識を総動員して、原生林に近いような環境を人工的に作り上げたらしい。

なんで、僕がそんなことを知ってるのか、というと、それは以前付き合っていた彼女のせいだ。

その彼女は、とにかく明治神宮が好きだった。

例えば、デートの行き先が決まらなかったとする。僕はそういうとき、どうしても自分の我を出せないタイプだ。映画に行きたいとしても、彼女がイヤかも知れない、と考えてしまつとつい自分の意見を胸の奥底に隠して、結局黙つてしまう。そういうとき、彼女は言った。

「そうだ、明治神宮行こうよ」って。

よく考えれば、18歳の女の子が提案するようなデートスポットではない。でも、彼女は明治神宮の鳥居をくぐるたび、本当に嬉しそうだった。僕は、そんな彼女の顔を見るのが好きで、僕もつられて嬉しい気分になったものだった。でも、さすがに朝早くケータイ

に電話があつて、「今すぐ明治神宮へ来い！！」って言われたときには「またかよ……」と心の中で不平をもらしたし、彼女の言つとおり取るものとりあえず明治神宮に行ったはいいものの、ムスツとしっぱなしだったけれど。そんな彼女だったから、僕は少し興味を持つて、明治神宮について調べたことがあつたのだ。

よくデートに使つたこともあつたから、明治神宮には特別の思い入れもあるし、その娘と付き合つた、2年ほどの思い出が沢山詰まつている。

それこそ、今歩いている参道にも、思い出があつたりする。実は、それは振られた思い出なのだけだ。

あのときは、確か冬だった。参道を二人して息を白くさせながら歩いているとき、いきなり彼女はこう切り出してきた。

「別れよっか」

最初は意味が判らなかつた。いや、正確には、理解することを、反射的に拒否していたんだらう。でも、何を訊いても、何を言つても、彼女の意思は変わらなかつた。

だから、僕は走つた。彼女を置いて。

今にして思えば子供っぽいことをしたなあ、と冷や汗ものだけけれど、あのときは、とにかく悔しくて、それ以上に哀しかった。そして、その悔しさ、哀しさが、僕の足にエネルギーを注ぎ続け、機関車のように走り続けてしまった。

もしあの場にそのままいたとしたら、静かな明治神宮の杜に、こんな僕の叫び声が響いたことだらう。

「なあ、僕の何が悪かつたのさ」

でも、もうあれから半年以上経つのに、結局僕の何が悪かつたのか、正直判らない。

そして、彼女とはそれから一度も会つていない。

道すがら、そんなことを、ああでもない、こうでもない、と思案しながら思い出の世界に浸る僕。そんな僕を馬鹿にするかのように、原生林の面をしたせいぜい樹齢100年の木々たちが見下ろしてい

る。そして、かさかさと、僕を笑い飛ばした。

「さて」

僕は踏ん切りをつけるように呟くと、背中の荷物の中から折りたたみの簡易椅子を取り出し、座れるようにした。そして、画用紙と鉛筆を取り出して、簡易椅子の上に座った。

僕は、彼女と別れてから、絵を始めた。

それは、カメラ、という趣味に飽きたからなのかも知れなかったと、考えて、でも、違うな、と心の中で即座に否定した。

僕がカメラをやめて絵を始めたのは、きつと空しかったからだ。

カメラは、そこに存在しないものを写し取らない。そのことが、なんだか空しく思えてしまったのだ。カメラは確かに芸術だ。でも、それはあくまで“現実”を切り取る芸術。今の僕には、思い出を写し取れるようなものが必要なのに。

元々手先が器用なので、絵を始めても、それなりに上手かった。

結局そのことが、半年も絵を描くという趣味が続いた一因になってはいるのだけれども。

僕は、画用紙の上で、鉛筆を躍らせる。同じような線を何回も重ねているようにしか見えないけれど、少しずつ鉛筆の軌道を変えることで、まるでモヤが消えていくかのように、僕の目の前にある、原生林と石製の橋のある風景が、真っ白な紙の上にトレースされていく。けれど、真ん中だけは空白にしておく。それは、彼女をそこに書き入れるためだ。

僕が明治神宮に来る理由。それは、彼女との思い出を、「思い出す」ためだ。

思い出、っていうのは、覚えているものだけではないはずだ。人間は、全ての思い出を覚えきっているほどには頭のいいものじゃない。たぶん、忘れ去っている思い出も数多いはずだ。……そう思い至った僕は、こうして明治神宮に行って、絵を描くことにしたのだ。彼女との思い出に、浸りたかった。

未練？ま、そんなところだ。

そういえば。僕は鉛筆を躍らせながら、さつそく思い出していた。彼女、ライダーズジャケットが好きだったな、と。

ライダーズジャケットというと、よくバイクに乗る人が着る、皮製で、前のジッパーが左肩の方に流れているあれだ。今年はどうやら流行しているらしいのだけれど、彼女はそれより以前から着ていたはずだ。

彼女は、服に対し頓着が余り無かったようだ。彼女のファッションは、「不味くはないけれど、かといって大学生としちゃ枯れてるよね」と評されそうな、少し流行からズレた格好をしていた。

そういえば、思い切って訊いたことがある。

「どうして原宿によく足を運ぶのに、原宿の服屋に入らないの？」と。

そうしたら、彼女はぴしゃりと言ったつけ。

「服を着るのは人間の義務だけど、きれいな服を着るのは権利でしかない」って。

なんだか、思い出せてよかった、と無邪気に思った。

そんなこんなと思いつつ鉛筆を躍らせていた僕だったけれど、さつきまで勢いよく動いていた鉛筆が、一番大事なところで止まった。あれ？どうしたんだ、なんで？僕は戸惑った。

彼女の着ていたライダーズジャケットまでは、しっかり描けた。だけど。なんでだろう。

彼女の、顔が描けない。

あれ、どうしてだ？

僕の戸惑いを、鉛筆は如実に写し出していた。僕の手のなかにある鉛筆は、踊りの続きを忘れたプリマドンナのように、てんで形にならない軌道を舞ったかと思うと、彼女の顔が入るべきところに、ぐるぐると円を描き出した。そしてやがてはそこに、まん丸で真つ暗な顔が浮かび上がらせた。でも、それは「顔」といったところで、ライダーズジャケットの上に丸いものが描かれているから「顔」だ、とわかる程度のものだ。

思い出せない。

そう。僕は、思い出せないのだ。彼女の顔を。

彼女の着ていた服は、頭に思い浮かべることが出来る。そして、彼女と過ごした日々思い出ても、その時感じた思いも、それこそ今のこのように思い出せる。

でも、その中心にいたはずの、彼女の顔だけが思い出せない。

僕は、鉛筆がぐるぐると躍ったあとに残った黒い顔に、思わず話しかけた。

「なあ、君は、どんな顔をしていたの？」

でも、画用紙の上で、笑っているとも怒っているともつかない黒い顔をさらす彼女は、何も答えてくれなかった。

絵を書くのを諦めた僕は、荷物を畳んで原宿駅に向かった。

でも。と僕は思った。きっと、何度来ても、彼女の顔だけは思い出せないんだろうな、と。

どんどん、記憶は風化してゆく。それは当たり前的事だ。そして、僕の記憶の風化は、彼女の顔から始まった。そういうことなのだろう、結局のところ。僕もまた、カメラみたいなものなんだ。僕は、参道の緩やかな下り坂をとぼとぼと歩きながら、そう思った。僕もカメラと同じく、結局は目の前に無いものは描き出せない。仮に描き出せたとしても、結局それは風化しかけた記憶のカケラを拾い集め、そして欠落してしまった部分を勝手な想像で埋めた、別のものなのだろう。

そう思い至った僕は、実はもう気づいていた。実は、「カメラみたいなもの」っていうロジックだって、自分を守るための言い訳だということ。

緑色の木々に隠された空を眺めて、頭を振った。まるで、言い訳を頭から追い出すように。そして、言い訳が去った後には、赤裸々な自分だけがうずくまっていた。

……僕は全てのものを理解できるほど精巧にも、そして

精密にも出来ていない。カメラはカメラでも、思いつきり画素数が低いデジカメみたいなものなんだ。それが、赤裸々な自分の答えだった。

そもそも僕は、と、僕は当時の自分に問いただした。あの子の顔を正確に覚えていたのかい？いいや、顔だけじゃない。彼女の性格も、行動も、全て理解できていたのかい？

何せ、僕は画素数が低いのだ。もしかすると、僕は彼女のことを、モザイク画のようにしか捉えていなかったんじゃないか？彼女の目立つカケラを選び出しては記憶し、そのカケラを繋ぎ合わせるために、自分の思い込みやら願望やらを糊にした、彼女のようにうでいてそっじゃないもう一人の「彼女」を頭の中で勝手に作っていたんじゃないのか？ライダーズジャケットをまとして、少し流行外れの服を着た、少し理不尽なところのある強くて優しい女の子、という僕にとつて都合のいい「彼女」を。

でも、それは画素数が低い僕が、やらなくちゃならない作業だったんだ。だって、人間は、パーツだけを見つめて他人と交わることなんて出来ないから。

でも、そんな僕を彼女は許さなかった。たぶん、嫌気が差したんだろう。彼女自身ではなく、頭の中の「彼女」に恋していた僕のこと。

そして、僕の中にいた「彼女」は、彼女との別れとともに消滅した。だって、頭の中にいる「彼女」は、思い込みにせよ、願望にせよ、彼女に対する思いから生まれたものだからだ。そうして、糊を失ってしまったカケラたちは、そもそもそれがどこのパーツだったのかもわからないほどに細かく風化していき、僕の心の中で漂っている。けれど、そのカケラたちは僕の心の中で、時折思い出とともに破裂する。まるで、「あたしのことを忘れないで」と突つつくかのように。

……ああ、そうだったんだ。ようやく、遅すぎたけれど、気づいた。

砂利がうるさい参道を、とぼとぼと歩きながら物思いに浸っていた僕の頭上で、不意に思い出が破裂した。

“へえ、あなた、カメラやるんだ？”

“え？君、やるの？カメラ”

“いや、あたし、カメラ撮る人間の気持ちかわからないの。だって、「きれいな風景とか、懐かしい人とかは、心のカメラで記憶すればいいじゃない？」って了見なもんだから”

“はは、それは一理あるかもね。でも、それじゃあ……”

“それじゃあ？”

“キレイな風景とか、懐かしい人の顔を、他の人と共有できないじゃないか”

“へえ……”

“どうしたの？”

“あなたの名前、教えて？”

“え？”

“あたしに反論できた人間の、顔と名前は覚えるようにしてるの。そういう人間は敵に回すと怖いし、味方は多いほうがいいね。あ、あなたの名前聞くからには、あたしから名乗るのが筋よね。ええと、あたしは……”

もう、僕にとってはまるで意味の無い言葉たち。

僕は、寒さのためか、鼻をすすり上げた。

原宿駅の改札近くで、不意に黒いライダースジャケットを着た女の子とすれ違った。でも、それはきつと、僕が恋したあの娘ではないのだろう。だって、今年はライダースジャケットなんて、原宿中の女の子が着ている。流行しているんだから。その女の子は、かつて僕の心の中にいた女の子がするのと同じように、颯爽と竹下通りの人ごみの中に消えた。あの子も、自分が好きだった人のことをす

べて記憶しているのだろうか、と、その女の子を目で追いながら、ふと思った。そして、彼女と明治神宮を詣でた後によく行った竹下通りにあるワッフルが美味しいカフェに、あの娘は今でも行くことがあるんだろうか、と心の中で呟いたけれど、でも、そういえば、彼女はコーヒーマイみたいな苦いものが好きで、ワッフルみたいな甘いものはそれほど好きそうではなかった、ということ思い出して、ため息を吐いた。

僕は、人の流れに少し抗って、駅前のちょっとした広場に立ち止まった。なんだか、不意に後ろ髪を引かれる思いに襲われたから。

そして空に向かって、心の中で呟いた。

僕は一生、君のカケラを持ち続ける。どんどんそのカケラは細かくなっていって、一見するともう消えてしまったかのようになっているだろう。でも、ライダーズジャケットを着た女の子を見るたびに、僕は心の奥にチクチクとした痛みを覚える。そして、カケラが残っていることを思い出す。僕はその度に君のカケラを拾い集め、組み合わせる形にしようとするのだけれど、僕の手に残っているカケラはピースが足りなくて、決して元の形には戻らないんだ。だから、僕は君のことを想いながら、カケラの一つを拾い上げて削って練って、絵の具を作る。そしてその絵の具はパレットの上で、僕の見た色・感じた色と交じり合って、どんどんその色を深く複雑に、けれどキレイなものに変えていく。僕は、そうして出来上がった不思議な色をパレットに載せて、筆に絡ませながら、次に会うだろう誰かを、そして僕自身を彩るために使っていくよ。ねえ、いいだろ？

心の中のカケラたちが、一瞬、かつて僕の中に住んでいた女の子の輪郭を形作った。その、朝モヤにかかったようにディテールがはっきりしない女の子は、確かににっこりと笑った。

僕は、空に向かって「さよなら」と軽く挨拶すると、切符を買って、原宿駅の改札をくぐった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3562d/>

原宿パレット

2010年12月14日03時46分発行